学位論文題名

スピノザとサド

— 知性の自立と道徳の自然主義的基礎づけ —

学位論文内容の要旨

序章 天使の墮落—トマス・アクィナスと知性の自律

本論文で、著者はトマスのいう墮天使を近代的知性の神から独立した姿と見立て、この知性が超越的な価値規範に依拠せずに自然主義的に道徳を基礎づけることは可能かと問う。純粹知性たる天使が過ちを犯すことができたのは、意志の倒錯による彼の傲慢と、その傲慢さが彼をして神の恩寵を排除させたからである。天使は純粹の知性的存在であるかぎり、神の恩寵を求めないからといって、自然本性的にはいかなる誤謬も悪行も犯すことはない。そうであるなら、墮天使は神的權威や超越的規範に依拠することなしに、道徳を基礎づけることが可能ではないのか。これが本論文の基本的な問いである。

第一部 合理主義の体系とスピノザ

第1章 言語・経験・表象知—スピノザ知識論の根底にあるもの

スピノザ哲学では、「表象知」(imaginatio)は最下等の知識として位置づけられる。しかし、imaginatioは認識様式としての「表象知」と同時に、認識能力としての「想像力」でもあり、「理性知」(ratio)および直観知(scientia intuitiva)の根底にはこの意味での imaginatioが機能している。というのは、想像力それ自体が、個物の現実的本質である「自己保存の力」(conatus se conservandi)の発現に他ならないからである。

第2章 魂の不死

「人間精神は身体と共に完全に滅びたりはしない。そのうちのあるものは残り、永遠である。」(『エチカ』第5部定理 23) この定理をめぐって多くのスピノザ研究者をさまざまな解釈を提起してきたが、著者はそうした解釈を批判的に検討して、「賢者は自己について十全的な認識をもつがゆえに個体として永遠に生き、そうした認識をもてない愚者は死とともにすべて失う」というまさにスピノザ的結論を導き出す。

第3章 精神と観念

スピノザの心の哲学には、(1)精神が身体の観念であるなら、人間精神は身体に起こるす

すべてのことを知っていることになる。(2)すべてのものが精神をもつなら、人間精神の特権性は認められない、という二つの批判がある。これに対して、著者は(1)人間精神が知覚できるのは身体所部分の変化がその全体に及ぶ場合に限られるから、身体諸部分に知覚されないことがあることはスピノザの見解に矛盾しない。(2)すべての魂が不死ではないように、すべての精神が表象知を能動的に使いこなすことはできない。「スピノザの体系は人間精神の特権性を保証しないが、すべての精神に平等を保証するものではない」と反論する。

第4章 完全性と道徳性—スピノザの弁神論

スピノザはトマス・アクィナスに代表される有神論の枠組みを完全に打破した上で、完全性すなわち善を個物の本質と同一視し、さらにこれを他の個物との力関係によって理解する。この見解はいわば「悪徳の栄え」を許容するとして同時代人の批判を受けたが、スピノザ自身はこの批判を「理性の導き」による社会性・共同性の確保によって回避できると考えた。しかし、このようなスピノザ自身の解決は、果たして彼に固有の倫理的唯名論あるいは心理的利己主義の必然的帰結であるのか。著者はこう反論する。この問題は、第二部第6章で主題的に考察される。

第二部 スピノザの倫理学とサドの背徳主義

第5章 スピノザと反宗教思想—『三人の山師論』を中心に

本章は、スピノザとサドの媒介として、17 世末あるいは 18 世紀初頭に執筆され、広く流布した反宗教文書『三人の山師論、別号スピノザの精髓』を取り上げ、スピノザはこの作品の基となる思想を何らかの仕方で知っており、それに対する自己の立場を明らかにしようとして『神学・政治論』を執筆したが、スピノザはそれに対する反応から自己の哲学体系が反宗教的風潮を助長しかねないことを危惧したことが明らかにされる。事実、スピノザ周辺のリベルタンの誰かによってこの文書が執筆され、それ以降この文書はスピノザ哲学の代弁者として受け入れられた。

第6章 スピノザとサド—利己主義と背徳主義の間で

筆者は、スピノザに彼の後継者を自認するサドを対峙させ、近世に固有の自然主義的倫理学において理性・性(rationalité)と社会性(sociabilité)は如何にして両立可能かと問い、そのような形で確立される倫理学はたんなる倫理的利己主義に留まり、道徳規範の基礎づけとしては不十分であると結論する。スピノザが、人間は理性の導きに従って生活するかぎり本性上必然的に一致すると主張するとき、彼は暗黙のうちにすべての人間に共通の「自然本性」に訴えている。これは伝統的な自然法思想への回帰に他ならず、彼の出発点である倫理的唯名論に矛盾する。それゆえ、スピノザはサドを論駁できない。他方、倫理的利己主義は無道徳主義に留まり、積極的に悪を称揚する背徳主義に至ることはない。

第7章 背徳主義と倒錯の論理—サドの世界はこうして生まれる

サドが彼の悪徳哲学を構築したのは、まさに「倒錯」によってである。常識的な意味での目的-手段の連鎖を意図的に切断し、この意味のない手段を目的として自虐的に追求することによって、背徳者は利己的打算と世俗的道德を破壊し、自己中心的な閉鎖的空間を形成して、そこに自閉し君臨する。ここから、倫理学説における背徳主義のもつ意義が明らかになる。道德は他者の存在を認め、その感受性と感情的相互作用を前提とする。これに対して、背徳主義はそれらすべてを自己の閉鎖的空間に包含し、そこでは理性も利己主義もすべて倒錯する。したがって、道德は背徳的独善性(利己心だけでなく自虐をも含む)だけはつねに排除しなければならない。

第8章 悪の問題とサドの哲学

サドは初め世俗的道德を否定し、自然に従うことによって「悪徳の栄え」を基礎づけようと試みた。だが、それでは道德的悪は生じない。決定論は人間の行為を含めて自然の一切の事象を善悪無記とするからである。したがって、道德的悪はこの自然からの逸脱、すなわち「倒錯」によってこそ現出する。「倒錯」は自然本性的な快樂や喜びを歪曲し、道德的悪をなすようにし向ける。しかし、自己の行為を悪と規定する外的規範は存在しない。その存在しない道德規範を犯しているという虚構こそが、彼をして背徳者たらしめる。道德的悪を支えるのは背徳者の想像力に他ならない。

終章 利己主義は背徳か

道德の自然主義的基礎づけに関して、倫理的利己主義を前提とし、また理性を利己的として理解するかぎり、この試みは必然的に失敗に終わらざるをえない。すなわち、利己主義には、(1)普遍的利己主義、(2)個人的利己主義、(3)一人称的利己主義の三つの形態が区別されるが、その基礎にある合理性の契機を強調するなら利己性を失い、また利己性に執着するなら合理性を失うという内在的矛盾を含む。言い換えれば、倫理的利己主義が一個の規範理論として成立するためには、自他の利害を調停する他の何らかの規範を導入せざるを得ないから、契約論あるいは功利主義に転化せざるをえないし、また利己性に執着するかぎり無道德主義に留まり、道德の名を語ることはできない。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 坂 井 昭 宏
副 査 助 教 授 花 井 一 典
副 査 助 教 授 佐 藤 淳 二

スピノザとサド

－知性の自立と道徳の自然主義的基礎づけ－

天使は純粹の知性的存在であるかぎり、神の恩寵を求めないからといって、自然本性的にはいかなる誤謬も悪行も犯すことはない。そうであるなら、墮天使は神的權威や超越的規範に依拠することなしに、道徳を基礎づけることが可能ではないのか。これが序章で示された本論全体を通しての研究課題である。この問題提起は極めて鮮烈であるが、その内実はスピノザとサドとを対峙させることによって、道徳の自然主義的な基礎づけの可能性を問い、同時にサドの悪徳哲学との対比で「道徳性」(morality)の外延を測定しようとするところにある。このように、本論文は表題「スピノザとサド」の与える印象に反して、優れてアカデミックな性格をもつ。

本論文の第一部「合理主義の体系」はスピノザ哲学に関する堅実な専門的研究である。第2章「魂の不死」と第3章「精神と観念」は、スピノザ研究における古典的難問を取り扱った専門的論考であり、著者の見解はいずれも妥当であると考えられる。また、著者のスピノザ解釈の特徴は、スピノザ哲学をデカルトからプラトンに遡る合理主義の伝統と、中世の唯名論者から近代のホブズ、ロックに至る経験論の伝統の交差する場として位置づけ、そのうえで後者の側面を積極的に評価する点に求められる。この傾向はとくに第1章「言語・経験・表象知」に顕著であるが、ここでは *imaginatio* に認識様式と認識能力との二義性を指摘し、後者を「自己保存の力」の発現と見たところに著者の独創性がある。

さらに、この *imaginatio* と「自己保存の力」との関わりに対する理解が、第4章「完全性と道徳性」におけるスピノザに対する疑義の根拠を形成する。すなわち、スピノザは完全性すなわち善を個物の本質と同一視し、さらにこれを他の個物との力関係によって理解した。彼の見解はいわば「悪徳の栄え」を許容するとして同時代人の批判を受けたが、スピノザ自身はこの批判を「理性の導き」による社会性・共同性の確保によって回避できると考えた。こうした点を踏まえて、著者はこのようなスピノザ自身の解決は、果して彼に固有の倫理的唯名論あるいは心理的利己主義の必然的帰結であるのかと反論する。

第二部第 5 章の『三人の山師論』はもっとも先行研究に依存する度合いの高い部分である。したがって、ここに著者の独創性を見出すことはできないが、むしろ著者が狭義の哲学史研究の枠を超えて、広く関連する研究文献を渉猟した成果として好意的に受け止めた。実際、本論文全体を通して、先行研究の成果を巧みに自己の問題圏域に取り込んでゆく著者の力量は高く評価されるべきである。

第 6 章「スピノザとサド」で、著者は第 4 章で提起した疑義に明確な回答を与える。すなわち、スピノザが人間は理性の導きに従って生活するかぎり本性上必然的に一致すると主張するとき、彼は暗黙のうちにすべての人間に共通の「自然本性」に訴えている。これは伝統的な自然法思想への回帰に他ならず、彼の出発点である倫理的唯名論に矛盾する。それゆえ、スピノザは彼の後継者を自認するサドを論駁できない。言い換えれば、道徳の自然主義的な基礎づけは、人間理性を利己的と規定するかぎり、理性的であることは社会的であることと両立不可能であるから、道徳規範の基礎づけとして不十分であるというのである。この結論は、終章で観点を換えて理論的に再検討される。

第 7 章「背徳主義と倒錯の論理」と第 8 章「悪の問題とサドの哲学」は、異端作家サドに関する哲学の分野からの犀利な分析として、とくにフロイトの「倒錯」の概念を巧みに応用した点で高い評価に値する。また、第 7 章では「道徳性の外延」、すなわち「道徳は背徳的独善性(利己心だけでなく自虐をも含む)だけはつねに排除しなければならない」が示されるが、この主張は我々の日常的実践において重要な意義をもつと判断される。さらに、第 6 章の倫理的利己主義は無道徳主義に留まり、積極的に悪を称揚する背徳主義に至ることはないという指摘を受けて、第 8 章では道徳的悪の虚構性が解明される。

終章「利己主義は背徳か」は主としてメタ倫理学的分析に基づいているが、本論文のトマスからスピノザを経てサドへ至る哲学史的考察に本章で理論的基礎を与えるという構成は、歴史的研究と倫理学的研究の見事な統一として高い評価に値する。

すでに述べたように、本論文の主題、すなわちスピノザとサドとの対比を通して道徳の自然主義的基礎づけの可能性を問うという主題のもつ独創性は十分な評価に値する。また、ここから導かれる結論、すなわち倫理的利己主義の規範倫理学説としての存立可能性、および悪徳主義による道徳性の外延の測定は極めて的確であり、本論文は所期の目的を十分に果たしたと判断される。さらに本論文を構成する 10 章のうち 3 章は、日本哲学会「哲学」、日本倫理学会「倫理学年報」などの学会誌に掲載され、すでに一定の水準に達した論文として客観的な評価を受けている。

こうした点を総合的に勘案して、本審査委員会は本論文が課程博士の学位を授与するに値するという結論に達した。